

マルチ映像における「目地」の問題

脇山真治<九州芸術工科大学>

1. 研究の目的

展示映像として上映されるマルチ映像は、システムや表現手法を問わず、隣接する映像の間に必ず境界線ができる。これは「マルチ」であることを前提にした作品の宿命であると同時に、マルチ映像たらしめる証でもある。しかしこの線の幅に関する基準はなく、実体は上映の技術的問題や制作者の感性に依拠して決定されることが多い。

本研究はマルチ映像の上映の伴うスクリーンの境界線、すなわち「目地」の意味を考察すると同時に、その適切な幅を、映像の大きさとの関わりにおいて検討することを目的とした。

2. 目地によるセパレーション効果

スクリーンには、映写機で上映される映像の四辺方向の見切りをより鮮明にするために、黒の回し縁（フレーム）がつけられる。マルチ映像でいう「目地」は、この黒のフレームが隣接するためにできる線をいうが、通常は隣接する映像はフレームを共有するためにその線は1本である。

マルチ映像の目地は、隣接する映像との境界を明らかにするために意図的に置かれる。映像が隙間なく接したときにできる隣接線とは異なり、2つの映像が2つであることを明確に意思表示する分離の線である。

マルチ映像では時として、臨場感を増し、大画面としての印象を強めるために全画面をまたいで、ひとつのショットを上映する。このとき目地はある種の「雑音」であり、鑑賞者はわずかに欠損した連続性を心理的な補完作用で完結させるといふ、余計なエネルギーを付加することになる。

もともと目地は、映像の異質性と領域性を明らかにするために置かれる線であり、一連の映像が分断され、それが視覚的ノイ

ズとなる欠点については、ある程度容認せざるを得ない。

3. 技術的な側面

目地は、技術的に見ると隣接した映像同士の微妙な重なりや離れ具合が見えがかり上極力無くすために設定する。特にフィルム映写の場合はアパーチャの仕上げ精度や、拡大投影時のエッジのボケの問題、さらには微細なキズでその直線性が損われることによって、映像の四辺の見切りに曖昧さと粗さが残る。

この問題を抱えたままマルチ映像として上映したとき、当然映像の隣接部分の粗雑さや仕上げの甘さが目立ってしまい、作品の完成度そのものを下げてしまう。これを避けるために「目地」という隣接映像同士が共有する干渉帯を設けることで先鋭かつ鮮明な四辺をつくりだすのである。

最近のマルチ映像の上映はビデオ（データ）プロジェクターが主流となっているが、フィルム映写機のアパーチャをはるかに凌ぐフレーム精度がみられる。加えて歪形補正機能を合わせることによって、目地幅は限界まで縮小することが可能になり視覚的ノイズとしての問題は、かなり低減された。このような映像同士の突き合わせでできる隣接線が極小目地となる限界幅だが、これは必ずしも目地の理想形とはいえない。

4. 極小の目地

マルチ映像では、目地の煩わしさを回避するために線幅を極端に細くしたり、映像を突き合わせたときにできる隣接線を使うことがある。この極小の目地は複数の映像をひと続きの大画面として使う場合は、相応の迫力を得る効果があるものの、時として個々の情報の存在を曖昧にしてしまう危

険がある。隣接する映像の区別がつきにくい場合は、2つの映像を突き合わせたときに、空間の違いや映像の異質性が、明らかな差異として表現しきれない。映像相互の関係の曖昧さは鑑賞者の不安をあおり、不快感を伴うことすらある。視覚的連続性を明確に断つことによって、視点の差別化を徹底すること。このことによってマルチ映像の「対比」の意味はさらに強化される。

5. 適切な目地の設定

一般にマルチ映像の作品は異なった映像を同時に映したり、一連の映像として大画面にするなどの表現が混在している。主として大画面として使うことを目的とした構成では、上映段階で「ブレンディング」(映像の境界近くを重ねて融合し、境界線をなくす手法)により目地のない状況をつくりだすこともあるが、多くは上映システムの宿命として目地が現れるために、その都度適度な幅を設定することになる。この線の太さは制作者の勘やシステム固有の不可避な条件として扱われるために、最も適切とされる幅は不明である。

本研究の最終目標は、上映される映像の大きさ(スクリーンサイズ等)と目地幅の最適な関係を見出すことにあるが、そのデータ収集のために次のような予備的な実験

を行なった。

<予備実験の概要>

3面マルチ映像をモデル化したものとして、3枚の写真を横に並べたものを用意する。各画面間の間隔、すなわち目地は1画面の幅に対して0%~10%の範囲で7段階のものを用意した。被験者は3枚の写真と目地のバランスの最もよいものに順位をつけて3枚選ぶ。実験用のモデルは、A:異なった写真のものと、B:パノラマ写真を3分割したものの2種類である。被験者は10名。

<予備実験の結果と本実験の計画>

Aタイプでは選択された多い順に 2.5%、1.7%、4.2%である。

Bタイプでは選択された多い順に 1.3%、2.7%、0.7%である

この結果①異なった映像を使う場合は、目地をなくすことは必ずしも上映計画として適切ではないと考えられる。②目地幅は画面の幅に対して適度な太さがありその割合は1.5%~2.5%の近傍に適正值があると考えられる。③連続した映像の目地幅は異なった映像の場合より細いほうが好ましい。

続く本実験では、目地幅を被験者自身が最も適切であると思われる太さを任意に設定して、より精度の高い数値を求める。これによって映像の分離機能と審美性の双方を同時に満たす適切な目地幅を求めることができるだろう。



図1) 1画面の幅に対する目地幅 8.3%



図2) 1画面の幅に対する目地幅 2.5%



図3) 画面間は隣接線のみ(目地幅 0 相当)



図4) 1画面の幅に対する目地幅 6.9%



図5) 1画面の幅に対する目地幅 0.7%